

京都部落問題 研究資料センター通信

第32号

発行日 2013年7月25日 (年4回発行)

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

報告 2013年度前期

部落史連続講座

当資料センター主催の「二〇一三年度前期 部落史連続講座」を京都府部落解放センターで、六月七日、一四日、二八日の三回にわたり開催しました。毎回、二〇名を超える参加がありました。

各回の講演要旨は次のとおりです。詳しくは、年度末に講演録を発行しますので、そちらを参考にしてください。

* * *

第1回

京都の渡来系氏族・秦氏について

— 開拓・外交・芸能系譜伝承 —
講師 菅澤庸子さん
(京都学園大学非常勤講師)

菅澤さんは、日本の古代社会で「外」と思われていた人々、渡来系の人々や蝦夷、隼人といった人々などのように受け入れられていたのかということテーマに研究をされている。今回は、京都のみならず日本の歴史に大きな役割を果たした「秦氏」について、殖産

興業・外交・芸能の三つの面に着目して説明をされた。

秦氏は倭王権成立以降、初めて渡来してきた氏族で膨大な人々が日本各地で様々な産業(養蚕、土木建築など)を興して王権・律令国家の底辺を支えた。中でも、京都(山城)は秦氏最大の集住地であった。

まず、山背における殖産興業の事跡の代表的なものとして葛野大堰がある。葛野川をせき止めて農業用水を確保する水路を作り嵯峨野を開拓している。八世紀には完成し、葛野川東岸は後の平安京となった。平安京の土台作りの一端を担っていたのである。またこういった土木技術や人員動力、財力は恭仁京、長岡京、平安京の造営にも寄与している。

秦氏は政治の表舞台に出てくることはあまりないのだが、外交の事跡として、七世紀初頭、聖徳太子の頃に対新羅外交の中で重要な役割を担っている。四世紀から七世紀にかけて東アジア情勢が変化

する中で、対新羅外交を武力誇示から和平交渉へと政策転換する際に、最初の応接役に起用されたのが秦河勝であった。また秦氏は、六〇三年に聖徳太子から仏像を下賜され広隆寺を創建している。この仏像は新羅からの請来仏との説もあり、新羅との友好をアピールする大きな役割を担っていたといえる。聖徳太子の仏教を基軸とする政治方針の拡大と国家安定の一端を担うものとして、すぐれて外交的な意味をもっているとの指摘もされている。

この聖徳太子の頃に活躍した秦河勝を能楽の始祖とする伝承がある。この伝承は、世阿弥が書いた『風姿花伝』に始まっている。古代の文献を探っても芸能に関する事跡は全くないにも関わらず能楽の始祖と位置付けられているのである。これは、「秦河勝と聖徳太子」といったように貴人とゆかりのある系譜を有することで、それまで賤しい存在とされてきた猿樂者の社会的地位を上昇させるための、大変重要な「語り」であった。最後に、渡来人について考えるとき、渡来間もない頃の特徴とともに、その後裔たちが歴史を重ねた世代のあり方への視点も必要で

あり、両方から捉えることが重要である。これは現代社会における五世、六世の時代になっている在日への視点にも通じる一面があるとされた。

第2回

近世京都・山城の葬送と

賤民・葬具業者

講師 木下光生さん

(奈良大学文学部史学科准教授)

木下さんは、江戸時代の土葬や火葬、墓地管理などをする三昧聖・隠亡などの被差別民や葬具業者などの葬送の担い手、葬送文化について研究をされてきた。昨年『長

楽寺蔵七条道場金光寺文書の研究』の刊行によって京都の火葬場の研究は大きく進んだ。その金光寺管理の火葬場・隠亡（埋火葬を専門とする賤民）を中心にして近世京都における隠亡のありよう・特徴を、これまで木下さんが研究されてきた大坂の墓所聖や三昧聖たちと比較しながら、金光寺の史料を使って紹介された。また、京都・山城の国における葬具業者たちの世界についても触れられた。

七条火葬場は七条高倉にあり、金光寺とはお土居をはさんで隣り

合っていた。一七世紀初め頃に鳥辺野から移設され、一八七一年（明治四）まで火葬場として稼働していた歴史を持ち、金光寺が管理・経営していた。これは隠亡たち自身が火葬場を営んでいた大坂・堺とは大きく違っている。また、金光寺の下で実際に働いていた隠亡は、血筋に則った「家」としての世襲ではなく、権利としての「株」によって引き継がれており、これも他の地域とは違う特徴である。大坂・堺などの三昧聖たちは百姓と同様に、家として世襲している。

葬送収入については、当時の覚書によると、火葬料は金光寺へ入り、隠亡には金光寺から扶持料が支払われており、従業員の立場であった。また、火葬業務のほかに葬具（輿や蠟燭など）の販売や賃貸にも関わっていたこともわかる。葬具の製造・販売・賃貸については隠亡もやっていたが、それを専門に扱う業者もおり、井原西鶴の『日本永代蔵』では京都での例が紹介されている。また、当時の職業百科事典である『人倫訓蒙図彙』でも「龕師」として京都の例がとりあげられている。葬式の華美化の中で参入する業者が増えて

業者間の競争もあった。しかし、彼らは町式目で町内居住を忌避される対象で、賤視をこうむるような立場にあった。

今後の課題としては、隠亡たちの宗教者としての立場はどうだったのか、また、近代以降、火葬場の統合の際に隠亡たちはどこへいったのか、ということなどがあげられた。

最後に、近世・近代の葬式帳の丹念な調査・分析によって更に葬送の実態が解明されることを期待すると締めくくられた。

第3回

花山の清目をルーツにもつ

近世の川田村

一村の三役揃い踏み

講師 辻ミチ子さん

(元京都文化短期大学教授)

山科の川田地域は、中世後期の「勧修寺文書」には「花山清目」として名前が出てくる。史料からは、中世の賤民である清目として掃除の仕事をするともに、田地を耕作して年貢を納めていたことがわかる。検地帳によると中世後期には、上田・中田を耕すような地域であった。

江戸時代の川田村の文書には「庄屋・年寄・頭百姓」の三役の名前があがっている。当時、穢多身分の村では庄屋は置けなかったことを考えると異例である。しかし、山科の他の村と平等であったかという点、村々の名前があがっている文書では川田村の名前は最後にあげられ、一字下げで書かれているということからも、一段低く扱われていたことがわかる。

江戸時代、他の穢多身分の村と同様に下村家の下で二条城掃除役を担い、下村家断絶の後には役人村の下で牢屋敷外番役も担っていた。しかし、穢多村の特徴的な産業である鬘牛馬処理に関する史料は見つかっておらず、携わっていないかたのではないかと思われる。農業一筋で農村の特徴を強く持つ村だったようである。ただ、山の麓にあるため水利が悪く厳しい暮らし向きであったようで、田を質に入れて年貢を支払うようなことがあったことが当時の地元の史料からわかる。

川田村は、京都の他の穢多身分の村のあり方とは違う面が多く、枠にはめて考えるのではなく具体的な史料に沿って当時の姿を知ることの必要性を語られた。

映画の紹介

「くちづけ」(監督・堤幸彦、脚本・宅間孝行)

渡辺 毅

(東九条マダン事務局長)

「母よ殺すな…」。映画『くちづけ』の上映が終わり、館内の灯りがともったとき、観客は十名にも満たず、周りにほとんど人がいないのをいいことに私がわざわざ声を出して洩らした感想は、障害者当事者運動史に残るこの有名なフレーズだった。

ところが、人が少ないと思っつい声にしたつぶやきは、人が少ないせいでかえってがらんだシアターに予想外に響き、離れたところで席を立った若い女の子が聴きとがめたふうにくちづけを見た。「母よ殺すな」にびんとこない人であれば、私のつぶやきを變に思っただけだ。何せ物語の中で娘を絞殺したのは、母ではなくて父、だったのだから。

變なつぶやきを聴かれた上に、流した涙の跡がまだ乾ききつていないのを見とがめられたかもしれない。映画やテレビのお涙頂戴の思惑にまんまと乗っかって涙を流す。これはほとんど私の体質で、だから断っておくが、涙腺がゆるんだからといって作品に心底感動

したとは限らない。現に、観終わっただけの『くちづけ』に、私は顔を涙で濡らしながらも、感動よりむしろ不愉快を覚えていたのだ。そしてこの不愉快をさし当たり言葉にしてきた。「母よ殺すな…」と。

若い女の子が私のつぶやきに、變だと思う以上の関心をもつわけがない。とつとつシアターを出て行ってしまった。だが私自身は、心の中にわだかまった不愉快を、かつて「青い芝の会」の人たちが声高に繰り返したフレーズで云い表したくなったそのわけを、つらつら自分なりに考えてみようと思っただけだ。そう、映画の設定に即して云うなら「母よ殺すな」ではなく、「父よ殺すな」。

ごくかいつまんで云うと、『くちづけ』(監督・堤幸彦、脚本・宅間孝行)は、不治の病で死期迫った初老の男が、知的障害をもつ一人娘の将来を悲観して、娘を絞殺してしまう物語だ。いや、これはいささか乱暴なまとめ方で、あるいは、知的障害者のグループホーム

をめぐる心温まる人間模様、とても云っておくのがさし当たりは妥当なまとめ方かもしれないし、現にこの作品が、そうしたポジティブな人間関係のありようを描くことに、少なくとも作品中盤まではそれなりの力点を置こうとした一面は認めざるを得ない。ところが一方で、物語はクライマックスの父による娘殺しという悲劇に徐々に収斂していく構造になっている。いろんな要素をこの結末へ向けた布石として打ったのだ、と、映画の作り手は自信をもって云うにちがいない。

けれども私に云わせれば、それらの布石は粗末な石ころばかりだった。作り手は子殺しの物語にこだわらず、子殺しを合理化するための粗末な布石を打つことに躍起になってしまった感がある。それゆえ、知的障害者のグループホームをめぐる心温まる人間模様を描く、という、それはそれで徹底すれば一つの思想たり得た営みからも、結局は作品終盤に到って落伍してしまっただけがある。

作品の舞台は埼玉県北部にある知的障害者のグループホーム「ひまわり荘」。この作品は、元來は脚本家である宅間が主宰していた劇団の上演作品で、ひまわり荘を唯一の景として展開する演劇ならではの設定が、映画の演出にも引

き継がれている。ここには「うーやん」と呼ばれる、高機能自閉症を思わせる三十代半ばの男(宅間孝行)の他、男性ばかり数名が暮らしていたが、そこへ「愛情いっぱい」の筆名でかつてヒット作を描いたこともある初老の漫画家(竹中直人)が、実の娘で知的障害をもつ三十歳の「マコ」(貫地谷しほり)と共に、住み込みの管理人としてやってくる。グループホームを運営するのは小児科医とその妻(平田満、麻生祐未)。夫婦には女子高生の娘はるか(橋本愛)がいる。はるかは、幼いころから生活を共にしてきたうーやんや他の入所者に対し、ごく自然に偏見なく接している。

偏見なく接している? そんな決めつけた云い方はなかるう、と思う向きもあるうがご容赦を。そこは作品の当初のスタンスがそうなのだから仕方ない。つまり、知的障害者とそうでない人たちの間に偏見や差別意識が介在しない、「心温まる人間模様」を描こうとする思想が、少なくとも作品の中心盤までは感じられるのだ。はるかはその象徴的な存在で、うーやんの描写を軸に、知的障害をもつ人たちの、常識から逸脱した生活態度や情緒の起伏が、いくつものエピソードを通して描かれていくが、それに苛立ったりあきれたりすることはあっても、否定したり貶め

たりはせず、知的障害者それぞれの生のかたちをそのまま受け入れる空気のようなものが、ひまわり荘にはごく自然に行き渡っている。この空気に、いっぽんは心動かされたはずだ。こんなふうには障害者があるのままの障害者でいられる場があるのか、と。それまでのいっぽんにとっては、マコの障害は悲しみそのものだった。マコは、男性から性的に受けた。マコは、とがあり、父親以外の男と二人きりになると発作を起こす男性恐怖症に取り憑かれていたらしい。施設に預けられてもすぐに逃げ出してしまふなど、いっぽん以外の他者とは打ち解けない傾向にあったらしい。それゆえいっぽんは、娘と悲しみを共有し、娘を社会の仕打ちから必死に守らなければならず、漫画の筆をも折って、ただひたすら娘のためだけに生きてきたらしい。父娘は濃密な情愛の情で結ばれている、という設定の背景には、そういう過去がある、らしい。

らしい、らしい。作品にとって重要なはずの要素を言葉の上でだけ説明して、観る者に「らしい」と受け止めさせ、映像の中で証さないというのは、映像作品としては感心しない。『くちづけ』の場合、濃密な親愛の情で結ばれた父娘、とは、とりわけ父による娘殺

しという結末を説得力あるものにしたのならば、非常に重要な設定だ。ところがこの重要な設定の裏付けとなる諸要素、つまり二人の過去についてはほとんど言葉の上の説明だけで済ませてしまっている。いささか唐突だが、私は、この物語の展開には「殺す」「殺さない」という二つの選択肢があったはずだと思っている。つまり、「殺さない」展開も十分にあり得た。さつき私は「知的障害者のグループホームをめぐる心温まる人間模様を描く、という、それはそれで徹底すれば一つの思想たり得た営みからも、結局は落伍してしまつた感がある」と書いたが、落伍しなければ、マコを「殺す」必要はなかった。「殺さない」に到る準備はそれなりに映像の中でなされてきたのだから。もともと、作り手は最初から「殺す」つもりだったし、「殺さない」展開など念頭になかったのだろう。ところが、「殺さない」準備がそれなりになされてきたのに比して、選択された「殺す」の結末は、言葉の上での説明ばかり連ねて合理化しようとしているにすぎない。こういうやり方は、感心しない。

開があり得たかもしれない中盤までの段階に、話を戻すということだ。マコはひまわり荘に来て、いっぽんには思いもよらなかった姿を見せた。周囲の人々とごく自然に打ち解けた様子を示し、とりわけうーやんとは、二人きりになつても恐怖の発作を起こすこともなく、楽しげにしている。知的障害者の男には性的抑圧者としての男性性が欠如している、と、もしかすると作り手は無意識に思っていたかもしれない。だとすれば由々しき偏見のようにも思えるが、そこは責めずにおこう。ともかくにもマコはうーやんと気が合い、互いに気を許し、挙句に二人は「結婚する」などと云い出すのだ。この事態を、いっぽんは歓迎しているように見えた。マコの知的障害は必ずしも悲しみ一辺倒ではない、と、いっぽんは感じたにちがいない。自分一人でマコを守らねばと気負って生きてきたが、自分以外にマコの人生の同伴者になると宣言する人物が現れ、マコもまんざらではなさそうだった。うーやんは、饒舌で気の向くままに行動するタイプだが、じつは繊細な心の持ち主で、時折優しい気遣いも垣間見せる。もちろん、知的障害者同士のうーやんとマコの結婚が実現するか否かは心もとない。けれどもひまわり荘には他にも、マコのこれからの人生を支え、あるいは温かく見守り続けてくれる人が集まっている。経営者夫婦然り、その娘のはるか然り。障害者と親、とりわけ一人親と障害児の關係に、ある種の類型があるとして、いっぽんとマコの親子關係は、そうした類型の一つをなぞっているといえなくもなかった。親が、障害をもつわが子の頼るべき存在は自分しかいないのだという觀念に支配されているケース。親が「この子より先に死ぬわけにはいかない」と大真面目に思っているケース。おかげで子どものほうも「親がいなくなつたら生きていけない」と思い込ませるを得なくなっているケース。背景には「この子を障害をもつこんな体に産んでしまった」という親の負い目があったりする。実際、私自身もそんな親そんな子に出会つた経験がないわけではないから、云いたくはないが、これは確かに一つの類型だ。いっぽんとマコもこのケース。しかし、ひまわり荘で暮らすようになり、心温まる人間模様の中に身を置き、マコはうーやんと意気投合し、父娘はこの類型から解放されるきっかけをつかんだ。仮に親がなくとも、心優しい人々との支え合いの中でならば、障害者は生きていける…。「殺さ

ない」結末へ向かって物語は進行していたのだ。だのになぜ？なぜ物語は、「この子を遺して死ぬわけにはいかない」と思いつめたいっぽんによる、マコ絞殺に到つてしまうのか。

はるか同級生の南（尾畑美依奈）というギャル風の女子高生が、興味本位にひまわり荘を訪れ、入居者たちに向かって差別的な言葉の数々を平然と放つ場面がある。南は、社会における障害者への差別意識、蔑視観が根強いことを象徴する存在として登場するが、同時にこうした差別や蔑視が浮薄なものであることを象徴する存在でもあり、かなりカリカチュアライズされて描かれている。はるかは南の言動に憤慨するが、うーやん、マコをはじめ入居者たちは南の差別攻撃に打ちひしがれることなく、痛快に反撃し、南をたじたじさせるのだ。この挿話一つとってみても、知的障害者は、少なくとも共に支え合うコミュニティがあれば十分に生きていける。それはいっぽんだって感じていたはずだ。

「殺す」物語に必要な設定で、いっぽんが「この子を遺して自分が先に死ぬわけにはいかない」と思いつめる親の類型だったことはすでに述べたが、展開の中でいっぽんはこの類型から解放されかけていた。だから、最初から「殺す」つもりの作り手がしようとしたのは、いっぽんを当初の類型に引き戻すこと。そのために作り手はあれこれ布石を打ち始めるのだ。まずはいっぽんに死期迫った不治の病を宣告し、このままだと娘より先に死ぬ、という事実を突きつける。いっぽんの心は激しく動揺し始める。

作り手は続けて、後事を託すべき人々を次々につぶしにかかる。まずはうーやん。うーやんには智子（田畑智子）という妹がいて、この妹のことが好きで好きでたまらず、毎週彼女がひまわり荘を訪ねてくるのを待ち焦がれていたのだが、この妹が、兄の存在ゆえ結婚が破談になるといった経験を経て、兄を自身のもとに引き取って共に暮らす決意をする。妹が好きでたまらないうーやんは大喜び。やがて妹に連れられてひまわり荘を出て行く。この出来事はいっぽんに、「知的障害者は結局は、血のつながった家族が面倒を見るべきなのだ。他人には任せられないのだ」という思いを深めさせたかもしれない。また、マコとの結婚を宣言したくせにうーやんはマコをそっちのけに嬉々として妹のもとへ去ってしまった、との感慨をさえ抱いたかもしれない。もつとも、もしこうした感慨をいっぽんが抱いたとしたら、それはいっぽんがうーやんを、所詮は知的障害者だからと思うかして、心底から信頼していなかった証しだと云わざるを得ない。なぜならうーやんはマコとの結婚のことを忘れたわけではなかったから。別れぎわにマコをカーテンの中に連れ込んで、「結婚の作戦を考えよう」などと話す、カーテン越しの二人のシルエットの美しいシーンがあり、私の涙腺が最もゆるんだ瞬間だったが、もしいっぽんがうーやんを信頼していたのなら、ここで自分が死んだあとのマコとうーやんの未来に希望を感じることができたはずなのだ。

次いで作り手がつぶしにかかったのは、ひまわり荘そのもの。入所者の障害者年金を頼りに運営されてきたグループホームが、家庭の事情で一人去り、次いでうーやんも去り、資金難で閉鎖を余儀なくされる。閉鎖を回避すべく別の新たな入所者を募集するという選択肢が、あったかなかったかは判らぬ。作り手としては、いっぽんからマコの後事を託す場を奪うことが、「殺す」展開上必須だったため、ひまわり荘閉鎖は避けられなかったと考えるほかない。いっぽんは致し方なくマコを別の施設に預けたが、マコはすぐ逃げ出してしまったらしい（ここは、らしい、だ。マコが居心地よく暮らせるひまわり荘のようなユートピアが他に存在しないのは、あえて映像上に描き出すまでもなかった、らしい）。

しかしこれだけではまだ、「殺す」という結末に説得力が足りないと考えたのか、作り手はさらに布石を打つ。いっぽんにマコの将来を悲観させるべく、みような情報をもたらずのだ。その情報とは「孤立した知的障害者には、生きるすべなく、犯罪を繰り返して刑務所を出たり入ったりする者が少なくない」「街で見かけるホームレスのうち、働きもせずただ茫然と生きているとしか見えない人たちのほとんどが、軽重の差はあれ知的障害を抱えている」の二つ。これらの情報の真偽についてはここでは触れまい。ともかくこの情報を得て、いっぽんの悲観は沸点に達するのだ。マコは自分が死んだら、累犯障害者やホームレスの境涯に堕ちる。このことが既定の現実であるかのような想念にすっかり囚われてしまうのだ。

あえて云う。何という、お粗末な布石であることか。だがこれで

布石は完了した。後事を託すべき人は誰もいない。娘にあるのは悲惨な未来だけだ。死期のいよいよ迫った。いっぽんは、娘を「殺す」決意を固め、そしてすでに閉鎖されたひまわり荘の居間で、マコの首を絞めにかかる。殺される直前のマコに、作り手が云わせた言葉。「いっぽんが死ぬならあたしも死ぬ」。そして父娘は接吻を交わす。『くちづけ』という作品タイトルの由来になったシーン。作り手は、親による娘殺しのこのシーンを、濃密な親愛の情で結ばれた父娘の悲話の象徴として撮った。そして、最大のお涙頂戴の思惑に満ちたこのクライマックスシーンに到って、それまで時折ゆるむこともあった私の涙腺は完全に栓を閉じた。

いや、その前から、累犯障害者およびホームレスに関する情報がいっぱいの苦悩を大袈裟にし始めた。父が苦悩の独り相撲をとっただけでは、ひまわり荘の経営者家族たちに、自らの死期が迫っていることを打ち明けてマコの後事について相談する、ということなげしいのか。ひまわり荘が閉鎖したかからといって、ひまわり荘関係者が態度を豹変させて冷たくなること

はあり得ない。迷惑はかけられない？ 彼らが知的障害者の人生と関わることを迷惑だなんて少しも思っていないことは、いっぽんだって分かってはいるはずだ。作品中盤までの「心温まる人間模様」はそのためにあつたのではないか。いつた作品の前半は、何のためにあつたのか。知的障害者が、血のつながらない他者と、支え合い、悲喜性を示しながら生きていける可能性を示したのではなかったのか。それとも、所詮他者なんてあてにならない、知的障害者は係累を失えばこの厳しい社会を生き抜くことはできないと云いたいのか。マコに「いっぽんが死ぬならあたしも死ぬ」などと云わせて、いったいマコに、殺されることへの無念がないとも思っているのか。まったく不愉快。「母よ殺すな」、もとい「父よ殺すな」。

生きていく値打ちのない障害者を殺しても罪にはならないとでも云わんばかりだ。障害があるうと一つのかけがえのない重い命であることに、何の変わりがあるものか。母よ殺すな。あるいは殺したからには、子の重い命を奪った親は、それ相応の刑罰を受けて然るべきなのだ、と。

映画『くちづけ』は、マコが殺され、その後まもなくいっぽんも不治の病によって世を去ったあと、物語の登場人物たちがひまわり荘に集い、亡き父娘を回想するシーンで締めくくられる。二人の死を知らないか受容できずにいるうーやんは、「いっぽん先生とマコちゃんが出来たら結婚式をする」と張り切っている。障害をもたない他の面々は、自分たちの無力を悔いながらも、父娘の人生の悲惨な結末を、もはや受け入れてしまったように見える。みんなお人好しという設定だから仕方ないのかもしれないが、殺人者のいっぽんを責める言葉が出てこず、マコの人生が奪われたことへの憤りが表出されないありさまに、私は苛立ちを覚えた。本来ならば「父よ殺すな」と叫ぶ側にいなければならぬはずの彼らではないか。それが、まるで減刑嘆願運動する側の人々に見える。

最後の最後に、いっぽんが死の直前にひそかに描き上げた漫画なるものが披露された。マコとうーやんが結婚して幸せに包まれるというストーリーの漫画。出演者たちはこれを見て涙するが、私の涙腺は固く閉栓したままだ。別のシーンで不覚にも流した涙が乾ききっていないのが悔しいくらいだ。こんな漫画を持ち出して、子殺しが美化されてしまうのが不愉快でならない。こんなものは身勝手な男のナルシズムでしかない。

私は、「殺す」物語自体を否定しようとは思わない。だが、情愛ゆえに「殺す」のであれば、他者の支えを一切峻拒して父娘間の情愛だけに沈潜していくくらいの情ゆえに「殺す」のであれば、現実社会の厳しさ冷たさを、憶測したり言葉の上だけで説明するのでなく、映像的にこれでもかこれでもか具体的に描き込んだ上での悲観であってほしい。だが、そのどっちでもなく、あまつさえ、途中までは「殺さない」人間関係の理想をひまわり荘に託す姿勢さえ見せていたにもかかわらず、結局は知的障害者を社会的に負の存在と決めた上での、あたかも健全な父娘の悲しい末路を描くようにして障害者を殺害したこの物語には、やはり「母よ」、もとい「父よ殺すな」と云わずにはいられない。

花田昌宣

熊本の被差別部落史編さん通信 山本尚友

本の紹介 腑分けの巧者—『蘭学事始』異聞— 大野滋著
中島康行

部落解放全国通信 64号 (日本基督教団・部落解放センター刊, 2013. 4)

座談会 「週刊朝日」差別事件

部落解放と大学教育 26 (全国大学同和教育研究協議会刊, 2013. 3)

春季企画 シンポジウム 部落の若者にとっての部落問題
部落を「居場所」にする 茗ヶ原真利絵／錯綜するアイデンティティの狭間で—被差別部落と外国人への差別に
いかに向き合うのか? 瀬戸徐映里奈／部落の中で生まれ育って 玉田崇二

秋季企画 公開シンポジウムと現地研修 (フィールドワーク) 京都の被差別民と芸能およびキリシタン迫害

紀伊国「鉢坊」の人たちと空也堂 藤井寿一／京都のキリシタンと迫害 笠井恵二／京都の部落解放運動 西島藤彦／京都の風物詩「鉢叩き」—「鉢叩」・「鉦打」・「茶筌」・「ささら」をめぐる— 沖浦和光

部落問題研究 204 (部落問題研究所刊, 2013. 3) : 1, 111円

特集 人権教育をめぐる動向と課題

「人権教育」の2011国連宣言と世界計画にみる「人権としての教育」 八木英二／人権・シティズンシップ教育の動向と課題 生田周二／人権教育政策の展開と人権教育の実践的探求 梅田修／地方自治体における人権教育政策の動向 川辺勉／和歌山県における中学校の人権教育の分析 谷口幸男／子どもの人権と教育実践 河瀬哲也

部落問題研究 205 (部落問題研究所刊, 2013. 6) : 2, 187円

第50回部落問題研究者全国集会報告

全体会 地域支配構造の発展 鈴木良

歴史1分科会<流通と身分的周縁>

市場と身分的周縁—大坂鞆を中心に— 原直史／近世和泉における種物の流通構造—絞油屋仲間と「素人」の関係分析を中心に— 島崎未央

歴史2分科会<戦時・戦後の「医療」・医療運動と民主主義的主体形成>

総力戦下のハンセン病療養所—長島愛生園における— 松岡弘之／1950年代における農村医療運動の展開と地域社会—埼玉県大井病院を中心に— 鬼嶋淳

現状分析・理論分科会<同和行政終結の課題と「人権救済機関」設置問題>

兵庫県における同和行政終結の取り組み 前田武／人権委員会設置法(案)をめぐる問題と機関のあり方 新井直樹／人権委員会設置法案及び人権擁護委員法改正案の

検討—行政法の観点から— 蔡秀卿

教育分科会<子どもの権利と教職員の人権>

大阪府・市「教育基本条例」の教育法的批判—教職員の人権を中心に— 土屋基規

文芸分科会<再生の時代に寄せて>

権利と倫理の間—自民党改憲草案の性格と対抗軸を考える— 碓井敏正／「幼年時代」論 作品生成へのアプローチ 稲垣広和

ライツ 168 (鳥取市人権情報センター刊, 2013. 5)

今月のいちおし! 『原発被ばく労働を知っていますか?』

(樋口健二著) 衣笠尚貴

新着図書紹介

『歩 識字を求め、部落差別と闘い続ける』(山本栄子著)／『およぐひと』(長谷川集平著)

リベラシオン 149 (福岡県人権研究所刊, 2013. 3) : 1, 000円

特集 教科書から「土農工商」が消えた?—第31回九州地区部落解放史研究集会報告—

教科書から「土農工商」が消えた? 部落問題歴史記述の変遷とその意味 阿南重幸／高校—日本史教科書の記述について 山川出版社『詳説日本史』を中心に 梅崎純司／熊本県における近世部落史研究の到達点と課題 花田昌宣／福岡県における近世被差別部落の「農業化」についての—考察 竹永茂美／近世被差別民の仕事について—警刑吏役を中心に— 中村久子／被差別民を指す呼称について—鹿児島藩私領都城の地誌「庄内地理志」を中心として— 黒木広志

新聞に見る部落問題関係史料 10 『全九州水平社史料集(仮)』草稿より 旧『全九州水平社史料集』プロジェクト

人格攻撃の差別記事だった!—『週刊朝日』「ハシタ」

問題決着のされ方— 石瀧豊美

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 14 勝海舟と永井青厓(上)—福岡藩の蘭学と解剖 7— 石瀧豊美

資料紹介 生活の柄 67 —『近世民衆史の泉』改め— 竹森健二郎

新刊紹介 『部落解放史の最前線—啓発・教育の現場と研究をつなぐ—』(服部英雄, 寺木伸明, 布引敏雄, 石瀧豊美著) 長岡俊光

歴史評論 754号 (歴史科学協議会編, 2013. 2) : 860円

大阪人権博物館と橋下市政 黒川みどり

和歌山研究所通信 44 (和歌山人権研究所刊, 2013. 4)

盲目の箏曲家宮城道雄と文豪内田百閒 市川訓敏

社会的差別の解明と史料調査—奈良県大同和問題関係史料センターの取り組みから— 井岡康時

はらっぱ 338 (子ども情報研究センター刊, 2013.4)

特集 「体罰」1 子どもの声、教師の声

ヒューマンJournal 204 (自由同和会中央本部刊, 2013.3) : 500円

部落解放運動40年を振り返って 7 差別事件と具体的に向きあう 灘本昌久

ヒューマンJournal 205 (自由同和会中央本部刊, 2013.6) : 500円

部落解放運動40年を振り返って 8 部落民の精神的特徴とは 灘本昌久

ヒューマンライツ 301 (部落解放・人権研究所刊, 2013.4) : 525円

差別禁止法を求めて 1 差別禁止法が必要である 奥田均

ヒューマンライツ 302 (部落解放・人権研究所刊, 2013.5) : 525円

インターネット上の差別情報

インターネット上の差別的表現をめぐる課題を考える～総務省のICT政策とプロバイダ責任制限法の枠組みによる解決を手がかりに 松井修視/インターネット上での差別情報の流布、とりわけ同和地区の所在地情報の流布をどう防ぐか 2012年度インターネット差別事象対策推進会議の概要から 竹下政行/公文書公開請求にかかる訴訟の取り組み 滋賀県総合政策部人権施策推進課

シリーズ マイノリティの声 1 自死遺族

ヒューマンライツ 303 (部落解放・人権研究所刊, 2013.6) : 525円

特集 部落の所在地を明らかにすること

部落の地名や所在地を明らかにすること—隠しきれないこの社会で 武田緑/部落の地名や所在地を明らかにする条件—セーフティーネット整備の重要性 上川多実/「『週刊朝日』差別記事事件」が明らかにしたものとは 赤井隆史

ひょうご部落解放 148 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2013.3) : 700円

特集 個人情報が狙われている—本人通知制度の必要性 連載・牛から命を学ぶ 3 「いただきます」から始めよう—牛を通して「いのちと出会う」学習実践から 足立須香

映画の紹介 「ぬちがふう (命果報) —玉砕場からの証言」 郭辰雄

本の紹介

『ピストルと荊冠 <被差別>と<暴力>で大阪を背負った男・小西邦彦』(角岡伸彦著) 高吉美/『私の座標』(赤瀬範保著) 玉田勝郎

部落解放 676 (解放出版社刊, 2013.4) : 630円

特集 『週刊朝日』差別記事事件

『週刊朝日』差別記事事件は終わっていない 赤井隆史/ジャーナリズムの社会的責任とは 『週刊朝日』問題が問うたもの 山了吉/メディアはなぜ暴走したのか

『週刊朝日』差別記事事件から考える 青木理, 角岡伸彦

東京音楽通信 宇崎竜童と竹田の子守唄 2 伏見人権の集いのステージに立つ 藤田正

本の紹介

『織姫たちの学校 1966—2006 大阪府立隔週定時制高校の40年』(檀日康之著)/『総合的な学習でめざす国際標準の学力 すぐに使える“新時代の人権教材”7つのテーマ』(松下一世著)/『パギヤンの大阪案内 ぐるっと一周〔環状線〕の旅』(趙博著)/『ひとり親家庭を支援するために その現実から支援策を学ぶ』(神原文子/しんぐるまざあず・ふぉーらむ・関西編著)

にんげんの街をめざす。にんげんの街で生きる。大阪市住吉区で福祉を広げる社会福祉法人あさか会の活動 木村雅一

循環社会のための伝統知レポート 国連生物多様性条約締約国会議「循環社会のための日印被差別マイノリティ会議」における報告 川元祥一

水平社論争の群像 5 東西両本願寺 朝治武

部落解放 677 (解放出版社刊, 2013.5) : 630円

特集 学級を担任するあなたへ

本の紹介 多義性の叙述という難問 八箇亮仁著『病む社会・国家と被差別部落』を読む 井岡康時

座談会 グローバル化のもとで解放の教育をめざす 『解放教育』から『部落解放』へ 森実, 園田雅春, 榎井縁, 桂正孝

水平社論争の群像 6 普通選挙 朝治武

部落解放 678 (解放出版社刊, 2013.6) : 630円

特集 リバティおおさかを支援しよう

本の紹介 宮崎学、小林健治著『橋下徹現象と部落差別』 内田龍史

差別と向き合う学びの深化を NHK番組「鶴瓶の家族に乾杯」にかかわる「過去帳又はこれに類する帳簿の開示問題」で問われたこと 岩本孝樹

差別禁止法と日本国憲法 内田博文

水平社論争の群像 7 遠島スパイ事件 朝治武

部落解放 679 (解放出版社刊, 2013.7) : 630円

特集 狭山事件50年

水平社論争の群像 8 綱領改正 朝治武

部落解放研究くまもと 65号 (熊本県部落解放研究会刊, 2013.3)

加藤清正と肥後の被差別民 山本尚友

熊本県水平社創立を担った人々—今日に生きるもの—

主体、自己、言語、アイデンティティ言説 朴育美
語りのポリフォニー—「在日外国人生徒交流会」という
活動の意味 森川与志夫

振興会通信 109 (同和教育振興会刊, 2013. 3)
シリーズ『私と同朋運動』 4 卒業のない運動 仲尾孝誠
同朋運動史の窓 16 左右田昌幸

「同和地区」における真宗事情調査について 伯水永雄
振興会通信 110 (同和教育振興会刊, 2013. 5)
過去帳に類する帳簿の開示はなぜ起こったのか 1 小笠
原正仁

同朋運動史の窓 17 左右田昌幸
真宗 1309 (真宗大谷派宗務所刊, 2013. 4) : 250円
人の世に熱あれ人間に光あれ 7 真宗大谷派同和関係寺
院協議会

真宗 1310 (真宗大谷派宗務所刊, 2013. 5) : 250円
人の世に熱あれ人間に光あれ 8 信心の課題 真宗大谷派
同和関係寺院協議会 米澤典之

真宗 1311 (真宗大谷派宗務所刊, 2013. 6) : 250円
人の世に熱あれ人間に光あれ 9 寝た子は起きている 真
宗大谷派同和関係寺院協議会

真宗 1312 (真宗大谷派宗務所刊, 2013. 7) : 250円
人の世に熱あれ人間に光あれ 10 真宗大谷派同和関係寺
院協議会

橘史学 27号 (京都橘大学歴史文化学会刊, 2012. 12)
平安時代の物忌 宮田智恵

地域と人権 1123号 (全国地域人権運動総連合刊, 201
3. 4) : 150円
国民的融合論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と
展開— 25 学者の貢献 2 丹波正史

地域と人権 1124号 (全国地域人権運動総連合刊, 201
3. 5. 15) : 150円
国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と
展開 26 学者の貢献 3 丹波正史

地域と人権 1125号 (全国地域人権運動総連合刊, 201
3. 6. 15) : 150円
声明 橋下徹市長の歴史を冒とくし、女性の人権を愚弄
する妄言に抗議し、公職を辞することを求める 全国地
域人権運動総連合
国民的融合論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と
展開— 27 学者の貢献 4 丹波正史

月刊地域と人権 350 (全国地域人権運動総連合刊, 20
13. 6) : 350円
特集 第8回地域人権問題全国研究集会第4分科会 「『根
深い差別意識』論と行政啓発のゆがみ」

地域と人権京都 642 (京都地域人権運動連合会刊, 20
13. 4. 1) : 150円
同和奨学金返還問題の検討 7 川部昇

地域と人権京都 643 (京都地域人権運動連合会刊, 20
13. 4. 15) : 150円
同和奨学金返還問題の検討 8 川部昇

地域と人権京都 644 (京都地域人権運動連合会刊, 20
13. 5. 1) : 150円
同和奨学金返還問題の検討 9 川部昇

地域と人権京都 645 (京都地域人権運動連合会刊, 20
13. 5. 15) : 150円
同和奨学金返還問題の検討 10 川部昇

地域と人権京都 646 (京都地域人権運動連合会刊, 20
13. 6. 1) : 150円
同和奨学金返還問題の検討 11 川部昇

であい 612 (全国人権教育研究協議会刊, 2013. 3) : 1
50円
人権文化を拓く 185 わたしたちは、問いかけつつ… 角
田尚子

であい 613 (全国人権教育研究協議会刊, 2013. 4) : 1
50円
人権文化を拓く 186 福島差別 奥田均

であい 614 (全国人権教育研究協議会刊, 2013. 5) : 1
50円
人権文化を拓く 187 今、在日コリアンの「結婚の壁」
に思うこと 朴君愛

であい 615 (全国人権教育研究協議会刊, 2013. 6) : 1
50円
人権文化を拓く 188 名前から考える歴史と現代 水野直
樹

図書 771 (岩波書店刊, 2013. 5)
小沢昭一的芸能史 山路興造

奈良県立同和问题関係史料センター研究紀要 18号
(奈良県立同和问题関係史料センター編, 2013. 3)
中世大和「盲目衆補任次第」を考える 山村雅史
明治期奈良県における部落問題の諸相
市制町村制期の奈良県における町村合併についての一考
察 井岡康時／奈良英和学校におけるアイザック＝ド
マン—『THE SPIRIT OF MISSIONS』の史料紹介を中心
に 片山周二／未遂の部落差別撤廃運動—帝国咸一会・
大日本咸一会— 奥本武裕

奈良県の雨乞い習俗と地域社会—被差別民衆史の視点か
ら— 池田士郎

奈良史学 30 (奈良大学奈良史学会刊, 2013. 1)
近世京都における寺院町の運営と捨子 林宏俊

奈良大学大学院研究年報 18 (奈良大学大学院刊, 201
3. 3)

近世京都の寺院町における運営の一側面—普請と往来を
めぐって— 林宏俊

日本史研究 608 (日本史研究会編, 2013. 4)

京都市歴史資料館紀要 24号 (京都市歴史資料館刊, 2013. 3)

京都市政史第2巻刊行記念シンポジウム 現代京都への転換—国際文化観光都市から世界文化自由都市へ— 大西裕, 佐藤満, 秋月謙吾

京都市歴史資料館開館30周年記念シンポジウム 平家三代—正盛・忠盛・清盛— 井上満郎, 臈谷寿, 宇野日出生

黒川道祐著日次紀事書名考 伊東宗裕

平成22年度・23年度歴史資料館の事業

グローブ 73 (世界人権問題研究センター刊, 2013. 4)

“海行かば”の由来 上田正昭

「鼻塚(耳塚)」の建造と明治の再修造の推移 仲尾宏

“人権の館” 京都部落問題研究資料センター 本郷浩二

藝能史研究 199 (藝能史研究会刊, 2012. 10) : 1,800円

書評 村上紀夫著『近世勸進の研究—京都の民間宗教者—』 林淳

藝能史研究 200 (藝能史研究会刊, 2013. 1) : 1,800円

藝能史研究会五十年の歩み

回想 藝能史研究会五十年の歩み 権藤芳一／資料 藝能史研究会の仕事 1963年4月—2012年12月／会誌『藝能史研究』執筆索引(1号～199号)

研究所通信 392 (部落解放・人権研究所刊, 2013. 5) : 100

抗議声明 日本維新の会共同代表橋下徹大阪市長に強く抗議し、謝罪と、発言の撤回を求めます 部落解放・人権研究所

国際人権ひろば 108 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2013. 3) : 350円

特集 人権をはかる—人権指標

国際人権ひろば 109 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2013. 5)

特集 3.11から3年目の南相馬市

こるむ 15 (在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件裁判を支援する会刊, 2013. 5)

朝鮮学校の歴史 11 寄附金税制上の問題 2 金東鶴

狭山差別裁判 437号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2012. 8) : 300円

野間宏と寺尾判決 14 庭山英雄

狭山差別裁判 438号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2012. 9) : 300円

野間宏と寺尾判決 15 庭山英雄

狭山差別裁判 439号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2012. 10) : 300円

野間宏と寺尾判決 16 庭山英雄

人権教育研究 21号 (花園大学人権教育研究センター

刊, 2013. 3)

一茶が描いた被差別民 1 「かわた・長吏」について 太田恭治

中世および近世における宿・夙村について—夙村の一考察 日岡 夙村— 森本泰弘

人権と部落問題 842 (部落問題研究所刊, 2013. 4) : 630円

特集 子どもの人権と学校

文芸の散歩道 千頭剛さんから譲られた坂市巖さんの遺稿 秦重雄

人権と部落問題 843 (部落問題研究所刊, 2013. 5) : 630円

特集 憲法とくらし

文芸の散歩道 近世文芸に著された賤民—穢多盗人の義心— 小原亨

人権と部落問題 844 (部落問題研究所刊, 2013. 6) : 630円

特集 食の安全・安心

文芸の散歩道 谷口善太郎の反戦小説二つ—「踊る」「行軍」を読む 水川隆夫

追悼 瀬川負太郎氏 植山光朗

人権と部落問題 845 (部落問題研究所刊, 2013. 7) : 630円

特集 体罰・いじめ問題

文芸の散歩道 多喜二の習作期にみる改作過程について 2 川端俊英

季刊人権問題 371 (兵庫人権問題研究所刊, 2013. 4) : 700円

八鹿高校事件の真実 被害者教職員完全勝利の理由—「解同」朝田・丸尾派の「差別性」

人権問題研究 12・13合併号 (大阪市立大学人権問題研究センター編, 2013. 3) : 1,500円

「排除の差別」を生み出す「障害の個人モデル」との闘い—「健全者文明を否定する」という「全国青い芝」の主張について 要田洋江

部落問題とその解決に対する市民意識の現状—自己責任論の台頭と、公的な問題解決に対する信頼の低下をめぐって 阿久澤麻理子

Japan's Colonial Responsibility and National Subject Formation 日本の植民地責任と国民主体の形成 Eika Tai (戴エイカ)

ブラジル日系コロニアと部落問題—部落問題は、どのように語られてきたのか? 野口道彦

近代大阪における都市部落の創出 吉村智博

在日朝鮮人のアイデンティティ、経路と模索—鄭大均と鄭香均 鄭榮鎮

語ることと主体—姜尚中の『在日』のナラティブ分析—

暴言に対する抗議表明 部落解放同盟中央本部

解放新聞 2622号 (解放新聞社刊, 2013. 6. 10) : 90円

解放の文学 86 池澤夏樹『双頭の船』 音谷健郎

解放新聞 2623号 (解放新聞社刊, 2013. 6. 17) : 90円

今月の本@ランダム

『芸能入門・考 芸に生きる』(小沢昭一, 土方鉄著)
／『若紫の無窮花』(李栄汝著)／『一週間』(井上ひさし著)

解放新聞 2624号 (解放新聞社刊, 2013. 6. 24) : 90円

ぶらくを読む 80 ケガレ論の現在 1 湧水野亮輔

解放新聞改進黨 439号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 2013. 6)

「同和」奨学金こそが今求められている! ~京都市の返還請求から4年が経過して~

解放新聞京都版 949号 (解放新聞社京都支局刊, 2013. 4. 1) : 280円

2013年度一般運動方針 (第1次案)

解放新聞奈良県版 978号 (解放新聞社奈良支局刊, 2013. 4. 25) : 50円

まちづくり運動のための資料紹介 1 洞村移転の歴史検証 辻本正教

解放新聞奈良県版 979号 (解放新聞社奈良支局刊, 2013. 5. 25) : 50円

まちづくり運動のための資料紹介 2 洞村移転の歴史検証 辻本正教

解放新聞奈良県版 980号 (解放新聞社奈良支局刊, 2013. 6. 10) : 50円

まちづくり運動のための資料紹介 3 洞村移転の歴史検証 辻本正教

解放新聞福岡県版 481号 (解放新聞社福岡支局刊, 2013. 5) : 50円

「同和融資焦げ付き」西日本新聞記事に憤り

解放へのはばたき 94 (日本基督教団部落解放センター運営委員会刊, 2013. 4)

特集 「狭山事件と私」~狭山事件から50年~

語る・かたる・トーク 217 (横浜国際人権センター刊, 2013. 3) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 14 「危険信号」に届かなかった私の言葉 外川正明

豊かな心を育むために 山梨県の部落解放運動・事始め 山藤太郎

性同一性障害者としての人生~女性だった25年間、そして男性としてのこれから~ 審判結果 前田良

語る・かたる・トーク 218 (横浜国際人権センター刊, 2013. 4) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 15 「お兄ちゃんと呼ばれて照れくさかったけど…」 外川正明

語る・かたる・トーク 219 (横浜国際人権センター刊, 2013. 5) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 16 「なんで、うちの町内だけ……」 外川正明

語る・かたる・トーク 220 (横浜国際人権センター刊, 2013. 6) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 17 「自分たちの町内のことをもっと知りたい」 外川正明

かわとはきもの 163 (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2013. 3)

靴の歴史散歩 108 稲川實

皮革関連統計資料

関西大学人権問題研究室紀要 65号 (関西大学人権問題研究室刊, 2013. 3)

大坂町奉行吟味伺書の考察 3 藤原有和

韓国民主化闘争以後の「韓国語辞典」にみられる特徴について—『延世韓国語辞典』の用例から読み解く韓国社会— 熊谷明泰

ビルダーボーゲンにおける人種問題 宇佐美幸彦

大学におけるインクルーシブ教育の展望と課題—障害のある聴講生との創造的コミュニケーション教育実践から学ぶこと— 加納恵子, 山崎秀子

教化研究 152/153 (真宗大谷派教学研究所編, 2013. 3) : 2,400円

特集 資料・真宗と国家 6下 1942~1945<太平洋戦争期>後篇 >

関西学院大学人権研究 17 (関西学院大学人権教育研究室刊, 2013. 3)

キリスト教と人権—関西学院大学における人権問題の歴史から— 舟木譲

<現場からの声>は届いたか?—原子力発電所と構造的差別— 三浦耕吉郎

<社会>とのつながりに向けた支援の必要性—「今ここにある『貧困』の現実パート1」を終えて— 阿部潔

<社会>を問い直す想像力の必要性—「今ここにある『貧困』の現実パート2」を終えて— 阿部潔

神戸新聞記事の「卒業証書の名前」と本名認識の動向 辻本久夫

KG人権ブックレット 19 (関西学院大学人権教育研究室刊, 2013. 3)

講演録

「戦争と原発~アフガン、シリア、福島を取材して」西谷文和／「私たちの未来、社会の未来」湯浅誠／「平和への権利」息詰まる世界の不安を超える第四世代の人権 武者小路公秀／「監視、識別、そして人権—個人情報IDシステムと社会正義をめぐる問い—」ディヴィッド・ライアン

収集逐次刊行物目次 (2013年4月～6月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

明日を拓く 99 (東日本部落解放研究所刊, 2013. 2) : 1,050円

特集 女性と部落

部落に生きて—西藤千代子さんに聞く 聞き手友常勉/1970年生まれのライフ・ヒストリー—埼玉県連事務局長の菊地直美さんに聞く— 聞き手吉田勉・藤沢靖介/女性たちが自伝を書く・自分を語るといふこと—山本栄子『歩 識字を求め、部落差別と闘いつづける』とウルミラ・パワル『人生を紡ぐ』に寄せて— 友常勉/近世被差別部落を生きた女性群像—近世関東の部落内史料に見る女性の具体像— 松浦利貞

アフーマティブやまぐち21 8号 (アフーマティブやまぐち21刊行委員会刊, 2013. 4) : 700円

山口県の被差別部落と差別撤廃闘争—山口県水平社創立九〇年— 割石忠典

山口県における主な被差別部落史関係研究論文について 割石忠典

明治末期・大正前期の山口県部落改善運動 忍克比古

IMADR-JC通信 173 (反差別国際運動日本委員会刊, 2013. 3) : 750円

特集 創立25年を迎えた反差別国際運動

ウィングスきょうと 115 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2013. 4)

図書情報室新刊案内

『グローバル人材になれる女性のシンプルな習慣』(中林美恵子著) / 『プリンセス願望には危険がいっぱい』(ペギー・オレンスタイン著)

ウィングスきょうと 116 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2013. 6)

図書情報室新刊案内

『理系女子的生き方のススメ』(美馬のゆり著) / 『彼女は何を視ているのか—映像表象と欲望の深層—』(竹村和子著)

解放新聞 2612号 (解放新聞社刊, 2013. 3. 25) : 80円
解放の文学 83 玄基榮『地上に匙ひとつ』 音谷健郎

解放新聞 2613号 (解放新聞社刊, 2013. 4. 1) : 90円
今月の本@ランダム

『部落解放史の最前線』(服部英雄, 寺木伸明, 布引敏雄, 石瀧豊美著) / 『百年の手紙—日本人が遺したことば』(梯久美子著) / 『歩 識字を求め、部落差別と闘いつづける』(山本栄子著)

解放新聞 2614号 (解放新聞社刊, 2013. 4. 8) : 90円
『週刊朝日』差別記事事件で話し合い

解放の文学 84 石牟礼道子『苦海浄土』 音谷健郎

解放新聞 2615号 (解放新聞社刊, 2013. 4. 15) : 90円
ぶらくを読む 78 融和運動を根本から考え直す—山本政夫・三好伊平次研究の地平 1 湧水野亮輔

解放新聞 2618号 (解放新聞社刊, 2013. 5. 13) : 90円
解放の文学 85 柴崎友香『わたしがいなかった街で』 音谷健郎

解放新聞 2619号 (解放新聞社刊, 2013. 5. 20) : 90円
ぶらくを読む 79 融和運動を根本から考え直す—山本・三好研究の地平 2 内務省主導の国民運動 湧水野亮輔

解放新聞 2620号 (解放新聞社刊, 2013. 5. 27) : 90円
橋下日本維新の会共同代表・大阪市長の暴言に抗議 部落解放同盟中央本部・中央女性運動部

今週の1冊 『ネット右翼の矛盾 憂国が招く「亡国」』 安田浩一, 山本一郎, 中川淳一郎著

解放新聞 2621号 (解放新聞社刊, 2013. 6. 3) : 90円
橋下徹大阪市長(日本維新の会共同代表)の人権無視の

事務局よりお知らせ

◇6月に開催しました部落史連続講座(全3回)は無事終了しました。今回も多くの方々が熱心に聴いてくださり、毎回質疑のやりとりも活発で、良い講座になりました。

◇ホームページで2006年度から2012年度の講演録を全て読むことができます。是非ご覧ください。

◇8月12日から17日まで解放センターが休館のため、資料センターもお休みさせていただきます。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://suishinkyokai.jp/shiryo/index.html>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分